

『源氏物語』の教育学的考察 その二

— 玉鬘十帖における王朝の女性教育 —

尾 田 綾 子

An Educational Study of "The Tale of Genji" II

by Ayako Oda

はじめに

『源氏物語』は、物語られた内容の深みにおいて、又、読者層の厚みにおいて、日本文化を代表する最高の古典であるが、これを平安時代の官廷生活を生きる姫君と其処に仕える女房達のために語られた「王朝女性の教育書」であると仮定して読み直してみると、五十四帖にわたる物語の構成・内容・表現などが歴然と理解され、更に、人間が人間を教育するという現代にも通じる文化的営みの全貌が、作者紫式部の的確緻密な配慮によって、除々に了解されてくるのである。前13号紀要論文では、豊かな心を育てるという視点から、「幼児の言葉の学び」を問題としたが、今回は、「女の御心ばへには、この君をなむ、本にすべき」と時の大臣どもを唸らせた素晴らしい女性の姿と、その様に育てられた教育の課程及び方法を、玉鬘十帖を通して検討考察したいと思う。

一 玉鬘十帖について

『源氏物語』五十四帖の中、二十二帖目の「玉鬘」の巻から続く「初音」・「胡蝶」・「蛭」・「常夏」・「篝火」・「野分」・「御幸」・「藤袴」・「真木柱」までの十帖は、玉鬘姫を女主人公とする別伝系の物語として扱われ「玉鬘十帖」と呼ばれている。古く鎌倉初期に成立したといわれる世尊寺伊行の『源氏釈』以来、この十帖は「並びの巻」と称されて世に伝来されてきたので、今日なお、源氏物語成立論が問題となる時、研究者達は様々の角度からの論証でこの十帖の位置づけを試みているものゝ、本伝紫上系の物語より一段と価値の低いものとするのが通例である。その論拠の主なもの、(1)玉鬘が夕顔と左大臣家の長男頭の中將の遺児であって「紫のゆかり」に入らない傍系の人物であるという正統史観によるもの。(2)これらの巻々は年中行事や正月風景

などを単に月次絵巻のように描出しているだけの風俗物語に過ぎないという正調物語論からする批判。同じく、(3) 物語に新鮮味が無く、個性や心理の追求も微温的常識的に過ぎないという物語二流論。(4) 光源氏の玉鬘姫への情念にしても、真摯な趣は見られず、人目と世間体を憚り、姑息な誤魔化しに終始しているなど純粹恋愛論からの非難、等々である。

玉鬘十帖を物語の筋を追って表面的に読むだけであつたら、こうした批判も傾聴に価するであろう。しかし、それでは作者紫式部がこの十帖に目論んだ意図を読み取ることはできない。『源氏物語』を王朝貴族の女子教育書であるとして考察すると、この十帖こそ、女性達が時代の中で生きるのに必要な、現実生活に直結する知識・教養のすべてを語っているということに思い至るのである。更に、ここでは王朝貴族の教養を身に着けず世間の笑物となる女達も登場するが、こうした体裁で物語りながら、当時の文化の中心である宮延世界を、この十帖に盛られたような質の高いものにしたいと願っている作者の心にも気付かせられるのである。

『源氏物語』全体の構想から眺めてみると、三十台を生きる光源氏は、手許に引取った明石姫君の女御教育、元服を迎えた長男夕霧の将来展望など子女教育に心を向けざるを得ない時期となつて、ここで巻々の流れが、本格的な男子教育論に続いて女子教育のあれこれを論じ始めていることに気付いた研究者も多い。即ち、「玉鬘」の前巻二十一帖の「少女」の巻では、初冠(元服)した十二才の夕霧の君——光源氏の長男であり、且つ母方の筋からみると左大臣藤原家の孫であり、将来、国の柱、官僚

の総元締ともなるべき運命が約束されている——の物語に紙面の殆どを割いている。本来、元服は男子が一人前になる儀式であり、この日を以て社会的地位に就き結婚も公認される筈のものであつた。——光源氏は父桐壺帝の慈愛に満ちた配慮により加冠の祝の夜に葵の上を添臥しとして許され左大臣家の婿君となつている——ところが、この冠者の君夕霧は、光源氏の深謀遠慮によって、殿上人には及ばぬ六位と定められ浅葱色の袍を与えられて、今まで共に遊び暮していた左大臣家の若者仲間につきかり差をつけられ、幼い矜持はこの上なく傷ついてしまふのである。更に任官も見送られ、二三年は本格的に勉強に励むべく身分の低い一般の若人と共に「迫りたる大学の衆」などと当時の上流貴族の子弟から嘲笑され見向きもされない厳しい「大学寮」生活に送り込まれてしまふ。他方、結婚の方も成り行きとは言えお預けとなる始末である。親無きどちとして祖母大宮に育てられた夕霧と雲居雁の幼い慕情は父内大臣の性急な政治的策略によって阻止され、その後六年間も相思相愛の仲を割かれることになってしまう。しかし、それも次のような光源氏の——更に言えば作者紫式部の——教育論に支えられての展開なのである。

つまらない親でも賢い子が追い越すという事は世の中にはめつたに無い事でございますし、まして、代を重ねるに従つて次第に劣つてゆく子孫の将来がとても心配に思えますのでこのように決めたのでございます。身分の高い家に生まれた者が、官職位階思いのまゝで、世の栄華・贅沢におごる癖がついてしまつと、今更、学問などで苦勞するなどは必要ないと思うようになるものです。そうなると遊び事や音楽

を好み、やがて思い通りの職に就き位が上ったりすると、時勢に従う世間の人々は、心の中では馬鹿にしながらも、うわべは追従し御機嫌取りをして付いて来ますので、その間はひとかどの者のように思われて立派に見えるようですが、時勢が移り変わり、力と頼む人にも先立たれて、勢力が衰える晩年になってくると、人々に軽蔑され、しかも頼る所も無い有様になってしまうのです。やはり、漢学の学問をしつかり学ぶことで心の基盤を培い、その上で、時に応じて柔軟に対処する大和魂も充分に発揮することができ、世間に認められることになるものでしょう。当分もどかしいようですが大学寮で学び、将来、国家の重鎮となり得る修養を積みましたならば、親が居なくなりましても、安心できることと存じます。目下のところ本人が見すばらしくても親が庇っておりましたら「貧乏な大学生」などと馬鹿にする者もまさか居まいと存じます。(私訳)

孫の忿満に同情する祖母大宮を宥める光源氏の説得は、ひとりの人間の全生涯を予想した真に愛情深い子育て論である。このような教育観を展開しつつ、甘やかしの無い厳しい教育の実相を、親の側、子の側から写實的に縷縷説き明かし物語る「少女」の巻は、当時の貴族社会に反省を迫ったものであろう。尚、今日の教育事情からしても瞳目に価する。

この男子教育の後に続いて趣を全く異にする女子教育の巻玉鬘十帖が重ねられているのである。男子を将来政治に関与させ官僚にする為には大学の専門の師にその教育を委譲し得るが、御殿の奥に在って、妻、主婦、母の三役を兼任する一人前の女性を仕立て上げるには、いつ、どこで、

だが、どのようにして教育したのであろうか。勿論、導き手の多くは生活を共にした母親、乳母、女房達であろうが、選ばれて宮中に参内する姫君達は、王朝の心・王朝の美的生活の支え手となり得るよう更に一段と優れた教養を身に着けねばならなかったものと思われる⁵⁾。そして又素敵な、魅力ある、思慮深い人間と思われることは、何時何処に在ってもすべての女性の願望でもある。その一段と高い導き手を、六条院という後宮に伍する大殿を造宮する光源氏に托して、物語はそのまゝ現代にまで及ぶ伝統的な「雅びの心」の在り方を明示しているのである。

『源氏物語』の中では、紫の上といい、玉鬘姫といい光源氏が生活の総ての面で師となり理想的女性に仕立て上げてゆく。物語は王朝期を理想的に生き抜く女性像を人の内部に働く「心」の面と外部に表われた「姿」・「行動」の面に分けて語り出してゆくが、紫の上系の物語で「心」の世界を追求し、玉鬘系の物語で「姿」と決断としての「行動」の具体的様相を描き出している。玉鬘姫の一部始終を読者の面前に呈示して、「女の在り方はこの玉鬘の姫君をお手本とすべきである。」という讃辞を養父光源氏と実父内大臣に述べさせることで、女性の常識的理想像はこの様なものと思いますが如何でございましょうと、読者に反省を促しているように思えてくるのである。

さて、王朝期の間が一人の女として性を自覚し、心豊かに、見た目にも美しく生きてゆくには、どのような知識教養を必要としたであろう。その前に『源氏物語』全巻から姫君教育の内容を考えてみると

A 物語の筋の運びの中で人生・社会の在りようを知る。

B 王朝生活を楽しむ為の知識・技術・教養^{セシヤ}を身に付ける。

C 人間心理に通じ自ら生き得る力を養う

の三点に絞ることができるが、この玉鬘十帖においては——物語られている内容は綾織物のように複雑綿密に係わり合っているが——具体的に次の三項目に分析して考察することができると思う。

- a 四季の営み——日本人の心を育てる懐しい伝統行事のあれこれ。
- b 常識としての教養——衣食住など生活のセンスと知識的教養。
- c 人間関係の基本——潔癖な結婚観と性的嫌がらせの拒否。

「初音」「胡蝶」春。「蛩」「常夏」夏。「篝火」「野分」秋。「御幸」に深雪を掛けて冬。「藤袴」はこの一年の移り行のまとめとして、翌年の秋の終りに尚侍として宮仕えが決ったという締括り。という具合に玉鬘十帖では、二帖ずつ分冊されて日本の四季の美しさ、深い情趣、折々の行事が語られ、更に、季節とは関係なく、それぞれの巻に一項目ずつ、この時代の姫君が心得ていないでは済まされない知識、教養が論じられている。そして、以上の内容に平行して、丁度、古今和歌集の「恋」の歌の順序立てのように、光源氏の玉鬘に対する「おもひ」が巻を追って意識され、押え難くなり、燃え盛り、漸く理性によって宥められ、意外な結末に収縮されてゆく、と続けられる。他方、玉鬘姫は、光源氏の情熱を「父と娘」の枠組からどうしても受け入れられず、堪え難い嫌な思いをしながら拒否し続けるのである。

以上この八帖に盛られた内容を、本論文では女性教育の内容として次に詳しく考察しようと思うが、それに先立つて、これ等の教育内容とは別に、最初の「玉鬘」の巻と、終りの「真木柱」の巻を『源氏物語』の他の四十四帖との筋の繋がりの中で要約しておきたい。

「玉鬘」の巻で語られるこの姫君の出自は王朝女性の教育書として玉

鬘十帖を読む時、これ程十全な条件を備えた姫君は他に考えられぬと思う程、完璧な着想であることが理解される。「帚木」の雨夜の品定めで、頼りない女「常夏」との話をした頭中将（当時は左大臣家の長男であり、今や内大臣として時めいている）の忘れ形見で、父親の方はこの母子を行方不明と見做し、母親の方は其の後ふとした事から夕顔の咲く五条の飯屋で光源氏と知り合い不慮の死に至り、実の行方不明者になり、姫は乳母に大切に守られ育てられたものの、運命に流され、太宰小式に任命された乳母の夫の一族と共に京を離れ、遠く筑紫の地に連れてゆかれたが、血筋は争われず美しく成長し、土地の男達からの求婚を「片輪の娘だから」と偽って避けつゝ何とかして京へ戻り父と再会することを望みながらも、小式の客死、頼りにならない遺族達……という訳で二十歳の年まで躊躇していたのが、大夫の監という田舎者の強引な求婚に逢って逃げ出し、財産抛棄一族離散の憂き目の中、乳母の長男の豊後の介の助けで漸く帰京するが、父に認められる当も無く不安な思いで過す程に、かくては神仏に祈願する他なしと参籠した初瀬観音詣の途中、椿市で昔の母の乳母子で六条院の女房となっていた右近と邂逅し、亡き夕顔に対する責務から姫を探していた光源氏の永年の夢が叶って養女として迎えられ、姫君としての躰を受けるよう花散里の御方の許に預けられる。次々と事件が展開し息も継がせぬ話の運びに、古典としての『源氏物語』を真面目に読もうと集った者達ですら思わず話に引込まれて、終りに至りあゝよかったと安堵する始末である。作者紫式部の親しい友人が九州の地に行っていた事は知られているが、九州の土地の言葉も巧みに挿入し、

神社仏閣、勝景の地も交えての鄙の世界の様相描写は王朝貴族にとって
は異国体験の思いであつたに違いない。この田舎育ちの娘を六条院とい
う最高の文化的環境の中に入れて、最高の教養人光源氏自らが親しく姫
君教育に手を貸し、二年の程に帝の秘書官ないのか尚侍に就いても恥ずかしくな
い女性に仕立てるといふ訳である。教育の効果がより良く実現するには、
(1) 出生の血筋(遺伝的能力)、(2) 保育者の愛情、(3) 成長期の文化
的環境のいずれが一番重要であろうか。続く物語の中で実父を同じく
する「近江の君」を(2)と(3)の欠けた状況で登場させ物笑いの種とす
ることで作者は自ら解答を示しているようである。ここで、玉鬘十帖に語
られた(3)の具体的内容を今日の素敵なキャリアウーマンの条件と比べ
て読むのも興味深い。日本人の心の様相は千年前と変り無いようである。
さて、結びの「真木柱」の巻は内侍としての出仕と髭黒大将との結婚
という形で玉鬘姫の一生が決つた後日談である。幸福の影に不幸ありと
いう具合で、髭黒大将の前妻とその子供達の家庭崩壊が語られる。ゆる
やかな結婚制度をとつていた当時では、こうした悲劇は随所に起きたの
であろうが、外出する夫に火取の灰を投掛けるといふヒステリックな精
神異状の振舞を優雅な物語の中で語る作者の意図はどこにあるのか。
『源氏物語』の中で、私の夫であるとか心に決めた男性が自分の許から離
れた時、六条御息所の場合は無意識の中に執念深い怨霊と化し、紫の上
は堪え難い悲しみに意気沮喪し生きる氣力を失うまゝに死を迎え、この
髭黒大将の北の方は我れにもあらず発狂する有様である。裏返せば、
太古からの女性の願い、幸福の原点が「家族揃つての懐かしい団い」で
ある事を明確に呈示しているように思われる。しかし、髭黒一家の深刻

な不幸を「あはれ」の心境からではなく、極めて意図的に「をかし」として
馬鹿馬鹿しく克明に写真し、笑いの中に玉鬘十帖を閉じているのは、一方
で、優雅に語られている六条院の生活も相対的なものであり、これのみ
が絶対的価値を有する最高の世界と考える必要は無いという作者紫式部
の人生観が此処でもはっきり顔を覗かせているように思われるのである。
何はともあれ、教育という営みは、個人の一生の幸福を願いながら、
個々人が生きる時代の文化、社会の要求に適応し得る能力の伸長をも計
らねばならぬものであろう。前述した玉鬘十帖における王朝の女性教育
の内容について、次に、具体的に考察したいと思う。

二 四季の営み——王朝の季節感と年中行事——感性教育センス

「初音」 正月元旦の朝といえば、日本人には、いつになっても新鮮
な清らかな感情が甦るもののようである。『源氏物語』の中では「年か
はりて」「年も返りぬ」「年たちかへる」という用語が随所に見られ、
続いて「うららかなる空」「なごりなく曇らぬうららかなる空」など美
しい日の光、穏やかな初春の零閑気が悦ばしく述べられている。めでた
い日に言忌こといまする習慣は他の巻にも散見するが、「初音」の巻では特に詞
を選び引歌を背後に改まった口調で春の到来を告げ、正月の行事の幾つ
かを描き出している。このように正月の祝儀を細かく述べているのは此
の巻だけである。

1 齒固はがため——齢よわいを固める意。正月一日から三日まで長寿を祝う
ために種々のものを食する祝儀。(大根・瓜・押鮎・猪突・鹿突)⁹⁾

2 餅鏡もちかがみ——お供え物として丸めた餅。鏡餅の前で一年の始めの祝言長寿の願いを唱える。「万代を松にぞ君を祝ひつる千年の蔭に住まむと思へば」(古今和歌集・素性法師)の歌を誦す。

3 年賀の人々・臨時客・参座——いずれも新年の挨拶の為にしかけることである。年賀は元旦の公用の挨拶、臨時は正月二日三日に撰閑家で行われる招宴、「請客の便なしに客人がふときたれるを云。」(花鳥余情)参座は男性が関係のある婦人方の許へ新年の挨拶に行くこと。

4 小松引——正月子この日の行事。小松を根ごと引いて長寿を祈る風習。植物の精気を摂取し健康と生命を維持する願い。

14 5 鶯うぐいすの初音——春の景物は「梅に鶯」である。明石姫君を源氏の許に手放した母明石御方の「年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音聞かせよ」の歌が巻名にもなっているが、一六三九年三代將軍家光の長女千代姫が婚礼の際に携えた蒔絵の調度品は「初音の調度」と呼ばれて今日まで称えられている⁽¹⁰⁾。それ程、初音の巻のこの場面の情趣、六条院の華麗な新春の有様は、日本の美の規範となったものと考えられる。

6 男踏歌——中国伝来の祝儀。正月十五、十六日に、男女が歌を歌い足拍子を踏んで舞い、地底の春の気配を目醒し活力を呼びもどす祝事。日本では天武天皇三年(六七五)にあった⁽¹¹⁾と言うが、正月十四日に舞人達が宮廷で舞ってから行列を作って院・東宮・中宮などを回り、酒宴・綿帽子の祿を賜る。『源氏物語』では「末摘花」「初音」「真木柱」「竹河」の巻で語られているが、円融天皇八年(九八三)をもって中絶したから紫式部はこの冬の行事を好いもの復活させたいものとして四度も触れたのではないかと思う。特に初音の巻の描写は細部にわたって活

き活きとしている。

以上、正月の行事は今日なお伝習されているものばかりで驚かされる。

「胡蝶」三月二十日余り、紫の上の住む春の御殿の御前の庭は、花の色鳥の声など春爛漫の美景を呈し、光源氏は新造船を池におろして船楽を行った。

1 竜頭りゅうとう鷄首けいすの船楽——舟のへさきに竜の頭と鷄の首をつけた二隻の豪華な舟。この舟を庭の池に浮かべて音楽の演奏を行う。六条院の初めての春の宴なので客人も女房も春に酔痴れる。

こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦をひきわたせるに、お前の方は、はるばると見やられて、色をましたる柳、枝を垂れたる、花も、えも言はぬ匂ひを散らしたり。ほかには盛り過ぎたる桜も、今さかりには、えみ、廊をめぐる藤の色も、こまやかに開けゆきにけり。まして、池の水に影を映したる山吹、岸よりこぼれて、いみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れず遊びつゝ、細き枝どもを食いて飛びちがふ、鴛鴦の、浪の綾に文をまじへたるなど、物の絵やうにも書きとらまほしき⁽¹²⁾

と言う下りは、先述の「初音の調度」に続いて「胡蝶の調度」⁽¹³⁾の意匠情景となっている。更に、ここで中宮方の女房が詠んだ「春の日のうららにさして行く舟は棹のしづくも花ぞ散りける」の歌と共に、滝廉太郎の名曲「花」の歌詞の背景になる程、春景色の典型として現代にまで影

響を及ぼしている。又、「絵に書いたらんやうなり」とある「花街鳥の文様」「波の作る綾目」は古く正倉院御物にも見られる模様であり、「廊をめぐる藤の花」は『白氏文集』中の「傷宅」の一部分を下敷にしている等々、ここに描かれた美しい春の光景は古事伝来の文化・教養による造型でもあるのである。自然の季節の移り行きの中に連綿と続く伝統的情趣を心から伝えたかったのであらうと思われる。船乗は夜まで続き酒宴となり、客人達は調子づいて音楽の合奏を続け、

安名尊あそび給ふほど、生けるかひありと、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり、ひまなき馬・車の立ちどころにまじりて、笑み栄え聞きたり。

と語られるように、すべての者が春の宵の美に酔痴れる姿は千古不易の情感として、今日の「お花見」にも通じるものであらう。

2季の御読経——春秋二季に紫宸殿に百僧を請じて四日間『大般若経』を講ずる。⁽¹⁶⁾ 東宮、中宮、院、摂関家も行う。ここでは六条院に里下りした中宮の主催である。客人達は今日は正式の束帯姿で参列する。そこへ紫の上から供養の志として「仏に花奉らせ給ふ」ことになる。

鳥・蝶に装束きわけたる童べ八人、かたちなど殊に調へさせ給ひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、金の瓶に山吹を。同じき、花の房もいかめしう、世になき匂をつくさせ給へり。南の御前の山ぎはより、漕ぎ出でてお前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜、すこしうち散

りまがふ。いとうらゝかに晴れて、霞の間より立ち出でたるは、いとあはれに、なまめきて見ゆ⁽¹⁷⁾

そして、帰り際は鳥と蝶の楽に合せて童達はひらひらと舞いながら山吹の籬のもと咲きこぼれた花の陰に姿を消す。緑は鳥に桜の細長、蝶に山吹襲をということになる。銀と桜、金と山吹、統一された調和色の此の日の衣装は、春の自然美に並ぶ人工美の極である。今日のコーディネーターファッションに勝る秩序ある美しさを創り出している。王朝人の美的センスはこのようにして磨かれ鍛えられたものと考えられる。

「蛩」「少女」の巻の中に『蒙求』の中国の貧乏学生、車胤が蛩の光で読書した古事が出て来るが、女性の為の教育書であるこの巻では、夏の景物「蛩」の青白い神秘な灯の中で美しい姫の横顔を心を寄せる兵部卿の宮にわずかに一瞬見せるという趣向を凝らしている。「夏は夜、月のころはさらなり。やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。」と『枕の草子』のあの有名な書き出しの文にも蛩は日本の夏の情緒の典型として述べられているが、その他、『伊勢物語』⁽¹⁸⁾にも『大和物語』⁽¹⁹⁾にも、蛩の光で女性の姿をほの見せるという話が語られているから、これ又、伝統的に日本人の心の中に深く刻印されているものであらう。

翌朝、兵部卿の宮と玉鬘姫との間で取り交わされた贈答歌は

鳴く声を聞こえぬ虫の思ひだに人の消つには消ゆるものか⁽²⁰⁾

声はせで身をのみこがす螢こそ言ふよりまさる思ひなるらめ⁽²¹⁾

という具合で、あえて思ひの「ひ」に螢の「火」を掛ける常套的なもの
にしているのも、常識を伝える教育的配慮と見ることができであろう。

五月五日の節句として、この巻では次の行事に触れている。

1 菖蒲の根引き — 五月五日には親しい人に菖蒲を贈る習慣がある。⁽²²⁾

根の長いのを引いて長寿を祝福すると共に、それを挿頭にさしたり軒に
ふき連ねて邪気を払う呪とした。ここでの兵部卿と玉鬘姫との贈答歌は

今日さへや引く人もなき水隠れに生ふるあやめのねのみ泣かれむ

あらはれていとど浅くも見ゆるかなあやめもわかず泣かれけるねの

「音」と「根」、「泣かれ」と「流れ」、「文目」と「菖蒲」などの掛詞は先
述と同じ意向で類型的な極り文句を頻出させている。尚、節句など行事
に関したものは、その日のうちに返歌するよう注意している。

2 薬玉 — 菖蒲、蓬、様々の花を五色の糸で飾りくくつたもの。親し

い間で趣向を凝らしたものを配り、頂いたものは身辺に釣下げておく、
薬草による暑さに対する健康法である。女性達には薬玉の語は懐かしい。

3 司の手結 — 左右近衛の馬場での騎射。二人ずつ組んで番えるので

手結と言う。五月五日を中三日、盛装を凝らして大内裏の馬場で本当の
騎射競技を行う。六条院では私的なくだけた行事として描かれている。

4 競馬 — 「えんなる装束つくして、身をなげたる手惑はしなど」と

あるように、華やかな競馬で、勝負が決まると打毬楽、落蹲などの舞楽
を笛・笙・篳篥などで吹き、鐘や太鼓も交って「乱声」大騒ぎである。

「常夏」 京都の夏は炎暑である。涼をとるには庭池の中に張出した
釣殿に行き、池面を渡る涼風に吹かれたり、氷水、水飯など冷めたい食
事をとることになる。更に、桂川の鮎、近くの川の石伏し(鯉)などを
御馳走する。『源氏物語』としては珍らしく食べ物について語っている。
夏季の体力消耗に備える為であろうか。又、夏の花として、唐や大和の
撫子が籬に咲き乱れる様子が語られているが、この花は別名「常夏」で、
玉鬘姫の亡き母夕顔が頭の中將から呼ばれていた名前でもある。

「篝火」 この巻は『源氏物語』五十四帖中一番短い巻で、文庫本四
頁に満たない程である。しかし、ここに描かれて初秋の夜のさりげない
たたずまいは流石である。私達は、日頃秋の感じを正にこの様な夜の深
さとして心の底に留めているのではないかと改めて反省させられる。

秋になりぬ。初風、涼しく吹きいでて……中略……五六日の夕月夜
は、とく入りて、すこし雲かくるゝ気色、萩の音も、やうやう、あは
れなる程になりけり。いと涼しげなる遣水のほとりに、気色殊に、
ひろがり臥したる檀の木の下に、打松、おどろおどろしからぬ程に置
きて、さししりぞきて、ともしたれば、御前のかたは、いと涼しく、
をかしき程なる光に……「たえず人さぶらひて、ともしつけよ。夏の
月なき程は、庭の光なき、いと、物むつかしく、おぼつかなしや」

何という静けさ、何という夜の闇の深さであろう。そして、闇を照らす篝火のゆらめく光。神秘的な風情のある趣である。この美しさがわからぬ様では、王朝貴族の仲間として歌の贈答は不可能であろう。

「野分」 春の花、秋の紅葉、「春秋の争」を思えば、「胡蝶」の巻に対応して秋の野の美しさを語るべきであろうに、この秋の巻では、意表を突いて暴風雨の様相を語る。仲秋八月、例年になく秋好中宮の御殿の庭は秋草の景觀が美事であった。そこに「野分、例の年よりもおどろおどろしく、空の色変りて、吹きいづ」「暮れゆくまゝに、物も見えず吹きまよはして、いと、むくつけければ」「大きな木の枝などの折るゝ音もいと、うたてあり」「夜もすがら荒き風の音にも、すずろにものはれなり」「暁がたに、風すこししめりて、村雨のやうに降り出づ」「道の程、横ざま雨、いと冷やかに降りいづ。空の気色もすぎに」など次々と描写も適確である。考えてみれば、日本の秋は台風無しには済まされない。今でも夏の終りともなれば今年はいよいよ台風が来ないようにと身構えているのだから、農事を主とした当時では一大関心事であった筈。記録によると、長徳四年（九九八）八月二〇日と長保五年（一〇〇三）八月二八日に烈しい台風があったということで、この頃作者紫式部は京都に居たと思われるので、この「野分」の背景には記憶された体験が使われていると考えられる。それにしても、『枕草子』（二〇〇段）の野分の文章が翌朝の乱れた庭の静的な客観描写にすぎないのに比して、『源氏物語』では、前述のように、時間の経過と相俟って暴風雨が吹きまくり通り過ぎてゆく動きが全身に感じられるように語られている。そ

して、この風の騒ぎの中で律儀に野分見舞に出向く若い夕霧の目に六条院の御婦人方を垣間見る機会が与えられ嵐の如く心を搔乱するという物語としての面白さも狙っているのである。

1 野分見舞——二百十日・二百二十日前後に吹く暴風。野分という呼び方は、『大和物語』など平安中期の文学作品から現われはじめており、「野分」は専ら日記や私家集の中で、人の安否を問う、或は見舞の人の訪れを待つという人間関係の一局面を形成する場に使われている。

「御幸」「その十二月に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見さわぐ」とはじまる「大原野行き」は、冬季の鷹狩りである。大原野は京都の西南、桂川の西にあり、その地の大原野神社は、藤原氏の氏神春日明神を遷したもので、一条天皇の参詣もあつたと言う。²¹『湖月抄』の註では「醍醐天皇延長六年（九二八）十二月五日、大原野行幸の例を模して書り」とある。この巻では、冷泉帝が催す鷹狩ということ、親王、上達部、文武百官の諸臣が晴れの儀に衣装持物を凝らして大行列を組み、卯の刻（午前五時〜七時）にお出ましになり、「朱雀から五条の大路を西ざまに折れ給ふ。桂川のもとまで物見車隙なし」という程、見物人も大変な数で、聖代の盛事として語られている。（1）寒さの中に活気をもたらす、（2）上は下の生活を知り、下は上の文化・威儀を仰ぎ見ることで、上下心を一に融合させる大切な国事であろうが、（3）冬場の狩は寒さに耐える栄養物を手にする事でもある。

『源氏物語』は史実を確かに踏まえながらも、かくあれかしと理想的に描き出している事が多い。「雪、ただ、いさゝかうち散りて、道の空

さへ艶なるに」という冬の風情の中で、「そこばく挑みつくし給へる人の、御かたち・有様」と語られるように、寒々とした季節だからこそ華やかに狩の装いを身に着けた方々の行列が映えるようである。雪もよひの冬の日、帝の行事ということで、上（官僚）・下（見物）和やかに狩の行事を執行なうのもあらまほしき姿ではあるまいか。この日、帝から酒食を奉った光源氏に雉一枝が贈られた。狩は単なる遊びではない。このように教育的配慮が窺えるのである。此の日、玉鬘姫は光源氏に促されて帝を拝し心を動かされ、又、実父内大臣・螢兵部卿宮・髭里大將などを遠望することにもなったのである。

以上、考察したように、春・夏・秋・冬、日本の四季の移り変りは、それぞれ趣き深く、その自然の情趣に添ってその美しさを充分心に収めることで、私達日本人の心も情感が磨かれ、豊かな人間性を育てて来たものと思われる。王朝人が生産の場から離れることで失ったものも多々あろうが、生産活動から離れて自然観照に徹することで得た「心の深み」は、厳しい宗教観を伝統的に持ち合わせない私達日本人にとっては、今なお、心の支え、人生観となる洵に貴重な文化財であると思う。

三 女性の教養 — 王朝女性の常識として — 知性教育^{エスプリ}

「初音」 美的たたずまい論

人間の精神にとって「住い」は大切な空間である。家のたたずまいを一目見るだけで亭主の人格が偲ばれるとは『徒然草』の言であるが、ドイツの教育哲学者O・F・ボルノウも人間の心を育てる Wohnung に

就いてその重要性を論じている⁽²⁵⁾。

光源氏は三十五歳の秋、身分に相応しい「住い」として六条院という豪邸を造営し、春・夏・秋・冬の四季の町にそれぞれの趣ある御殿を造り、紫の上・花散里・秋好中宮・明石の御方を上と為して住まわせた。館の女主人達はそれぞれ好みの季節に適った庭を造り、家具・調度を整え、侍う女房、家臣の衣装も季節毎に準備した。自然と文化の融合が計られたのである。特に、春の御殿は「初音」の巻のはじめに、

まして、いとゞ、玉をしける御前は、庭よりはじめ、見どころ多く、磨きまし給へる御方々の有様、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。春のおとゞの御前、とりわきて、梅の香も、御簾のうちの匂いに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ。

とまで賛美されている。この御殿内で人々はどの様に暮していたのか。

「玉鬘」の巻の終りで、暮の「衣配り」の情景が語られ、「着給はん人の御かたちに、思ひよそへつゝ、奉れかし。着たる物の、人さまに似ぬは、ひがひがしうもありかし」という紫の上の言葉につれて、光源氏から贈られたのは、△紫の上▽紅梅の、いと、いたく文^{もん}浮きたるに、葡萄^{えぶ}染の御小桂、今様色のすぐれたる。△明石姫君▽桜の細長に、つややかなる搔練^{かいはり}とり添へて。△花散里▽浅縹^{はなだ}の海賦の文、織様なまめきたれど、匂ひやかならぬに、いと濃き搔練具して。△玉鬘▽くもりなく赤き、山吹の花の細長。△末摘花▽柳の織物に、よしある唐草を乱り織りたるも、いと、なまめきたれば。△明石の御方▽梅の折枝・蝶・鳥、飛びちがひ、

唐めきたる白き浮文に、濃きが、つややかなる具して。△空蟬▽青鈍の織物の、いと心ばせある、御料にあるくちなしの御衣、臍色なるそへて。と、一人一人の個性に適合して用意され、「おなじ日、みな着給ふべく御消息きこしめぐらし給ふ。げに似けついたる見むの御心なりけり」とある。そして、「初音」の巻で、光源氏は年賀に出向き、かの衣裳がどのように生活と調和しているかを確めてゆくのである。

△紫の上▽梅の香が匂い「生ける仏の国」と賛えられた春の御殿で、紫の上の紅梅襲の衣は洵に優雅な伝統的な調和を作り出したことであろう。

△明石姫君▽前庭の築山で、童達が小松の根引をしている。「姫君はいと美しげにて明け暮れ見奉る人だにあかず思ひ聞ゆる有様」とあるから、薄色の桜襲が若々しくかわいらしいことであろう。

△花散里▽「いと静かに見えて、わざと好ましき事もなく、あてやかに住みなし給へるけはひ見えわたる……縹は、げに、にはひ多からぬあはひにて……」と教養深く、素直で地味なお人柄がそのまゝ表われている。

△玉鬘姫▽まだ住みはじめたばかりで、召使も調度品も良い物は揃っていないのに、何となく美しく住み成している。山吹襲の黄色の華やかな衣は才たけて、こだわりのない明るいお人柄に大変良くお似合である。

△明石の御方▽御簾の裡から吹き匂わす追風も優雅で高貴な雰囲気がい、光源氏が訪れた時、唐風の調度の部屋には草子や琴がさりげなく取り散らかしたまゝで、本人の姿は見えず、「由ある火桶に侍従香をくゆらかして」という有様、神経の行届いた、理知的なお人柄が髣髴する。

△末摘花▽髪は白毛になり瀧のようである。お召物は光沢もない黒っぽい下着の上に、先日柳襲をいきなり羽織っていかにも寒そう。「柳は

げにこそ、すさまじかりけれ」と全くお構い無しの野暮な有様である。△空蟬▽尼になって、ひっそりと暮しているものの、経、仏の飾り、閑伽の具など優美な風情があり、「なほ、心ばせあり」と見られる。青鈍の几帳の陰に身を置き、贈られた梔子色の桂を袖口にのぞかせて……この方は、以前と変わらず、奥ゆかしく、つましくて及第である。この様に、敏感で、緊張感の漲る調和の、好ましい世界空間を醸し出して、そこに身を置くのが好ましいと語っているのである。

「胡蝶」 恋文の読み方書き方論

光源氏が玉鬘姫を自邸に住ませようと、紫の上の許可を得た時「かかる者ありと人に知らせて、男達——弟の兵部卿の宮など——が、この籬のうちに心魅られて集るのを見たい」と不謹慎な好き心から発言して窘められたりしているが、こうして集った恋文を、親ぶって自ら読み、玉鬘姫に、あれこれ注意を与えている。つまり、ここで「男からの手紙の判読方法」の教育が行われるという事になる。

△蛸の兵部卿の宮▽玉鬘姫の夫として第一候補者。光源氏の弟君。多少とも物のわかる女性であつたら、この方との文通は絶対に面白い筈。

△髭黒右大将▽実直で重々しいのが取得。そういう人が情熱的に書き送ってくるのは見ものである。

△柏木中将▽唐の縹色の紙で薫香の深くしみ匂へるのを小さく結んだもの。「思ふとも君は知らじなわきかへり岩もる水に色し見えねば」と、清冽な湧水に喩えた若々しい恋いを、今めかしく、しゃれた筆跡で書いている。光源氏は、はっとしたに違いない。「誰のか」と聞かすが、本人

は目下恋心など全く関心がないので読んでもない。源氏は注意する。

「浮氣の男が不真面目な行為をするのは、一方的に男の咎だとは言えぬ。

一寸した手紙に返事を怠ると、馬鹿にされたと残念がり、熱心になることだであるのだ。男性からの手紙にそれなりの返事を書いて、そのまゝ男が忘れてしまっても、女性の方の落度ではない。ただ、一寸した手紙に待ってましたとばかりすぐ返事する必要はない。女性が奥ゆかしさを忘れて心の赴くまゝに「物のあはれも知り顔に」素敵がつて返事していると、度重なる程に嫌われてしまう。相手（宮とか大将とか）を判断して、情愛やら熱心やら心ざしの趣を洞察して返事をせよ。全く返事をしないと馬鹿扱いされる。身分の低い者からは、相手次第だからより慎重に。女性は結婚して落着いてはじめて一人前扱されるのだから、そこを考へに入れて行動するように」「宮は北の方を亡くして今は独身だがお通いのところが多いので、嫉妬心のある者は嫌われるから要注意。大将は年経た北の方に嫌気がさし、こちらに熱心なので面倒ですね」と。

「蜚」物語とは何か。（文学論）

かの有名な『源氏物語』の物語論は、この「蜚」の巻に語られている。五月雨の頃、つれづれにまかせて、六条院の御方々は物語の書写、挿絵書き、装幀に余念なく一日過している。幼い姫君の為に行っているようだが、玉鬘姫は田舎育ちで物語に疎く、新に学ぶ事や、数奇な運命を重ねて反省する事が多いので熱心に取り組んでいる。それを見て、この暑いのにと光源氏はつい女達を揶揄してしまう。「物語には嘘が書かれてるのに、わざわざ騙かされる為に面倒な書写などやっているのか。嘘

と知りつつ、つまらね事にうつつをぬかしてよいものか」と言い、嘘を分析する。(1) 成程さもありなんと人の心を打ち、尤もらしく書かれたものは、他愛無いと思っても、可愛いらしい姫君がもの思いに沈んできたりすると思わず心がひかれてしまう。(2) とんでもない事と思いつつ大袈婆な誇張した話には心がひかれる。(3) 再読に堪えられないのに、ふと面白く読んでしまう話。「それにしても、要するに虚言です。」玉鬘姫は珍らしく反論する。「嘘をつき慣れた人は物語をそのように読むかもしれません、私には真の事としか思われません」その本気な口調に押されて光源氏は賛成論を口にする。「全くそうでした。物語は神代からありました。日本紀などより世の中の事が詳しくわかりますね」と。これは作者紫式部の持論であろう。ここで「物語論」を学ぶことにより『源氏物語』の読みも深まる筈である。

物語は、この世の人間の姿を伝えるものであるが、個人的な誰その事実について語るのではなく（伝記ではない）、善い事も悪い事も含めて、見聞した印象深いことを自分の胸一つに納め難くて言い置きはじめたものである。世にある様々の事実の中から、選び抜かれた真実——語るに値するものを語るのだ。「よきさまに言ふとは、よきことの限り選り出でて、人に従はむとは、又、悪しきさまの、珍しき事を取り集めたる、みな、かたがたにつけたる、この世のほかのことならずかし」すべてこの世にあった事だけを語っているので、決して、空想（嘘）ではないと言う主張である。しかし、在るがまゝに写実する自然主義文学とは一線を劃した文学論である。こちらの方は語手の意図が強く問われることであろう。物語は、言葉を媒介して知的にも情的にも他者の存在・心を体

験することができる。つまり、人間世界・人間精神を知り得る第一の手だてをと考える今日の文学論に通じるものである。

それにしても、続いて、光源氏は、物語を続むことで幼い者は影響され易いから、「世馴れた物語などな読み聞かせ給ひそ」と明石姫君の教育係である紫の上に注意を与えている。物語一つにしても育てる側には聡明な配慮が必要のようである。

「常夏」 内大臣の姫君教育論

内大臣は「いと物きらく／＼しく、かひある所つき給へる人にて、善し悪しきけじめもげざやかに、もてはやし、また、もて消ち軽むることも人に異なる大臣なれば……」などと光源氏が評するようなお人柄である。一国の元締として、情に溺れず理知を極める合理的精神の持主とされている。その御当人が愛娘雲居雁の昼寝姿を見かけて注意を与える。姫君は暑さの午後を、かわいらしい手に扇を持ったまゝ、腕を枕に臥せていらっしやる。無心におっとり父君を見上げた目許も美しい。

女は身を常に心遣して守らねばならぬ。無防備な有様で女房も近くに控えず、うたた寝などするものではない。しかし、あまり賢く身を固めて不動の陀羅尼を読んで印をつくる姿でも困る。又、気高いのが良いと言っても現実の人間から遠ざかってしまったようなのは心美しくない。光源氏の姫君教育は「すべての教養を知っていて、しかも、角々しく才気ばしっておらず、又、たどたどしく不案内で困ることもない有様」とゆるるかな巾広いお考えのようだ。⁽²⁶⁾

というのが大要である。他方、近頃探し出された近江の君の方は、どう見ても姫君として扱うことができない。容貌は悪くないし性質も善良だが、王朝人としての身のこなし方が皆無である。大臣が様子を見に行くと、身体で簾を大きく外に張出して仲間の若い女房と双六に興じている。手を押揉んで「小賽、小賽」と祈る声があともなく早口だ。ここで、近江の君の「声」「話し方」が問題とされている。人の「声」というものは本人が無意識であるだけに人柄を直截に現すから要注意である。下品な声として、早口、締りの無さ、嬌声、上調子。そして、「会話」は、相手の心を洞察しつゝピントを合わせて進めてゆかなくては面白くない。近江の君は、御身分上ではおかしい事まで、一生懸命やればいいのでしようとばかり働き廻り、時と処嫌わず臆面なく物を言い、下手な歌を贈り……時代の求める奥ゆかしい姫君像から全然ずれてしまっている。

だが、これは気がついた者の一寸した教育で矯正される筈のものである。内大臣は自らの怠慢を反省すべきであったのだ。次の「篝火」の始めに、光源氏から厳しく批判されている。「普通であつたら、姫君は深窓に養われて人が見る筈もないのに、御大層に迎えながら女房に仕立てて人目に晒し噂されたりするのはおかしいやうだ。内大臣は事をはつきりさせる御方だが、深く調べもせず連れ出し、お気に召さぬとあって、心無い扱いをなさるとは。やり方次第ですべて穏やかに済むものを。付き人も相談役も教育係の女房も揃えず放り出して、笑ひ者にするなど気の毒なことだ」。実父に引取られなかった玉鬘姫は幸運であつた。

「篝火」 音楽論

王朝人は誰もが楽器の一つや二つ名演奏できなければ話しにならないし、『源氏物語』の中では事ある毎に「遊びの宴」が語られている。

「常夏」「篝火」の両巻にわたって音楽論が展開されているが、取り立てて和琴に触れている。この日本産の琴は、秋の夜の月の光が涼しい頃、虫の音に合わせて弾くと親しみもあり華やかな感じのする楽器である。改った演奏法とて無いが、どの楽器の音色・調子にも合わせられるところが素晴らしい。国産の楽器で一見何でも無いようだが、巧妙きまる作り方である等々。そして、この楽器の名手は内大臣であると言う。

14 秋の風の音に合わせて琴を弾く。盤渉調に笛吹く者。拍子うち出て忍びやかに謡う者。心合わせての合奏は人生の楽しみの一つである。しかし、光源氏は「少女」の巻で若者が音楽にのみ心入れする危険を説いている。

研究紀要

「野分」 多彩な女性美論

野分見舞に激しい風雨の中を歩き廻った若者の目が一瞬の間に捉えた女性の美しさは、雰囲気的な全体感というものであった。夕霧は垣間見た一人一人の美しさを、心の中で、花の美しさに譬えている。

△紫の上▽「気高く清らに、さと匂ふ心地して、春の曙の霞の間よりおもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す……愛敬は匂ひちりて、またなく珍らしき人の御さまり」この時、紫の上は前栽の小萩を心配して端近で見守っていた。にこやかな感じで女房達も自由にのびやかである。

△秋好中官▽さすがに御姿は拝せないが、ほのかな朝ぼらけの程、御簾

撫子・濃き薄き柏などの上に女郎花の汗衫^{かきみ}など着けて庭に下り、虫籠に露を与えているという艶なる有様である。夕霧の来訪を知ると、人々はさりげなく「みなすべり入りぬ」と礼儀正しい。

△明石の御方▽下仕えの者や童など酒落た柏姿がくつろいで庭の龍膽・朝顔が籬に倒れているのを引起したりしている。御方は、もののあはれに心を動かされて、箏の琴を爪弾いている。一幅の絵の様な風景である。△玉鬘姫▽嵐の一夜を眠れなかったのか、寝過して今起きた許りの様子「ほほづきなどいふめるやうに、ふくらかにて、髪のかかれるひまひま美しうおぼゆ」「八重山吹の咲きみだれたる盛りに、露のかゝれる夕映ぞ、ふと思ひ出でらるる」紫の上より少し劣るが見ていると自然に笑みが浮かんでくるような美しさだと評される。

△花散里▽台風一過の朝の冷え込みに、大勢の女房達が集って裁縫を始めている。花散里も御自分で素敵に染め出した色々の布を広げている。△明石姫君▽風を怖じて起きられなかったり、人形の家が毀れることだけを心配する幼い姫君は「これは藤の花とやいふべからむ。木高き木より咲きかゝりて風に靡きたる匂ひは、かくぞあるかし」と譬えられた。仕えている女房達は流石で、夕霧はここで手紙の紙の色と結び着ける物との調和を教えられることになる。

△祖母官▽のどやかに仏前で御勤めしている姿には優雅な趣が見られる。

「御幸」 慶事の贈り物論

玉鬘姫を尚侍として出仕させるには、素姓を表明する必要がある。遅まきながら、光源氏は六条院で裳着の儀を行うことに決め、この姫が

一生使うことになる調度・道具類を立派に調える。御腰結は実父の内大臣が当たる。輝かしい祝儀に光を添える贈り物が、当日届けられるが、相手と贈り主との身分・関係をよく考えて調達すべき事が語られている。

△祖母宮△美しい櫛箱。一生使う物として幾種類もの櫛を納めてある。「ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛筈わが身離れぬ懸子なりけり」と孫を愛しむ歌と共に良い記念品となるであろう。

△秋好中宮△白き御裳・唐衣・御装束・御髪上の具、と当日の晴れ装束を時の中宮から贈られるのは光栄である。更に唐の匂高い薫物を戴く。

△御方々△六条院の婦人方は、相談し合い、競い合って、衣類・櫛・扇など女房達の分まで用意する。個々の美事な出来映えと、調和の良さ。

△東院の人々△お祝する人数には至らないので遠慮しているのに、常陸宮の御方だけは几張面になさる。型通りに、お目にかける程のものでないので女房達へと謙遜してはいるものゝ、麗々しい包みの内は、喪服色の衣・地味な衿の袴・古ぼけた色の小桂、そして「わが身こそ恨みられけれ唐衣君が袂になれずと思へば」とひどい筆跡。光源氏は赤面する。私達は今日なお贈物が大好だが、良く考え心を籠めて贈るべきであろう。

四 人間関係の基本——潔癖な結婚観——モラル分別教育

光源氏が玉鬘姫を六条院に引取ったのは、故き母夕顔に対する責務であった。しかし、迎える前に姫の資質を吟味し魅力ありと認めると、若い男達を集める賑いの種にしたいなどと紫の上に計り、父親らしくないと笑われる位の浅い気持であった。玉鬘姫の方も気が進まず、人々の勧

めで、実父の認めを得る手段として承知した。両者偶然の出逢である。

「初音」旧年十一月に花散里の西の対に移られて未だ二ヶ月、源氏君は姫の美しさに御機嫌で「春の御殿への来て明石姫君と琴など御一緒に」など誘う。姫は一言「仰せの通りに致しましょう」と返す。そこにわざわざ草子地で「適当な返事である」と語手の意見が添えてある。生殺与奪の権を握っている者に対して、確にこれ以外の返事は有り得ない。

「胡蝶」源氏君の心の底には、十七歳の頃の、あの夕顔との身も心も蕩けるような想出が潜んでいた。養父という立場で近づき素顔まで見慣れるようになった現前の玉鬘姫の若さと美しさが、かつての日々に重ならない筈はない。恋しいとは流石に言い出しかねるが、気色ある言葉の時々口に出す。姫の方は気がつかない。君は足繁くむやみに姫の許に出掛て行く。暇々に昔物語を読んで姫も漸く人の世の男女の在り方を知りようになるが、実父に引合わせない君のなさり様に不満である。君の方は紫の上に気づかれて反省もするが、見れば見る程、在りし日の夕顔そっくりで、思わず手を取って「夢のようです」と言うのに、姫は本当に嫌だ困ったと身を固くするが、表面はあくまで気づかぬ振をして済まそうとする。君は益々思いを深める。姫は心憂く身体も震えてくる。「どうして私を嫌うのか。さりげなく人前をつくるえばよいではないか。義父の愛情と恋人の愛情が重ったら世に類ない心地がするであろうに」とは相手を自分の慰みものにしうとする中年男性の身勝手な論法である。本当の親であつたら、ほって置くことはあっても、こうは扱うまいと思う

と姫は悲しく涙が堰を切る。「それ程嫌われるとは情ない。見知らぬ男であつても、男女の仲の常として、女は皆身を任せるものなのに。こんなに長い間親しんで、この程度のお近づきをどうして嫌がりなさるのか。無理強いするつもりは全く無い。ただ我慢できない程好きだと思ふ気持ちを晴らすだけです」これは源氏君の口を借りた当代の男性の本音であろう。美しい女性に心魅かれた自分の気持ちに素直に従つて何で悪いことがある。人目が具合悪いなら、さりげなくもて隠して二人で楽しむのに何の不都合があるか。好きだと言つて大切に思っている男の気持ちを受け入れぬ法はあるまい。姫君の方は情けなく泣けてくる。始めから恋の当事者として対蹠していたらそれなりの心の用意もあつたであろう。親代りとして身を委ねた相手から突然この様に打明けられて戸惑い、度を失い、相手の年長者ぶつた物言いに自己の運命の頼り無さ、存在の小ささが頼無く、涙をもつて抗議したものと推察される。召使の女房達まで君の優しい振舞を「実の親でもこれ程でない」と誤解し感激するので、姫は不愉快な思ひをどうすることもできない。翌朝「うちとけて寝もみぬ物を若草の事あり顔にむすぼほらん」子供っぽ過ぎると手紙が来たのに、返事をしないと回りが怪しむであろうと、事務用の白い大きな紙に姫は一言「拝見しました。気分が悪いので答歌は失礼します」と書く。恋情をはつきり言葉にしてから君は平気で度々姫を悩ます。姫の悩みの真相は「養父と娘の間に恋の気持が生じたりしたら、人笑われの事であろう。本当の父親に知れたら他人以上に浮わつた女だと思われてしまうに違いない」という分別に拠るものである。

「蛩」六条院での源氏君は御身分の重々しさに適わせて万事もの静かに暮していたのに、玉鬘姫に思ひを表わして以来、心落ちつかず、世間体を気にして辛じて自制心を保っている状態である。姫の方は相変らず、父親代りを恋人にするなど受入れ難いと思ひ、君が恋人らしく振舞うと胸がどきどきするが、ひたすら気がつかない風を装つて一時のがれを続けている。そうしている中に、実の親に知られて内大臣の姫君として源氏に恋われるなら「似げなくもあらまし」と姫は考えるようになる。義理の父として恋われるのが世間体が悪く口惜しいのだと自覚されるのである。危うい均衡を保つて、夏の夜々が過ぎてゆく。

「常夏」内大臣方では、娘の弘徽殿女御は秋好中宮に負け、雲居雁も夕霧中将との間でつまづき、撫子姫君（玉鬘）を探すと間違つて近江君が現れるという具合で、源氏君に押され通しである。しかも、近江君を教育しようともせず、女御様に預けて人々の笑い種にしてしまう。こうした扱いが玉鬘姫にもわかつて、君の厚いもてなしに方に感謝の気持ちを持つようになる。君は押さえ難くなる心を鬼にして考える「苦しむまいとして思ひのまゝに振舞つたら、世間の人は必ず非難しよう。それは自分より、この姫の為に堪え難い。それに、どんなに愛情が深くても紫の上に対する気持ちに勝るものではあり得ない。たとえ我が身が素晴しくてもそれでは姫の幸福にはなるまい。平凡な納言の身分でも二心なく姫を思う者の方が良いに決まつている」しかし、目馴れるにつれ愛敬づき生き生きとした美しさの増す姫をそのまゝでは手放せそうもない。「この邸に置いて婿取をさせ、世馴れゝば、我が思ひも無理に押し通すことがで

きるかも」など全く無法な考えまで持つに至る。

「篝火」とこう迷いながらも無理押しせず愛情の増す一方の御様子に姫も次第に素直に心を打解ける。和琴の手引きをして頂き、もろともに添ひ臥すこともある。たゞ、髪に手を置かれたりすると、身を固くして恥じる姿に变りは無い。

「野分」この親しげな二人の姿は、野分見舞に歩く息子の夕霧に、然と見られてしまった。変だ、親子でもこれは近しすぎる。姫は迷惑そうにしているものゝ君に抗がわず寄りかかっている。おゝ嫌だと思う自分の心まで気恥しいと、真面目な潔癖な若者は思う。この時二人は風にかこつけて軽い冗談を言い合っていたのである。君にとってこれ又捨難い。

「御幸」玉鬘姫への恋に苦しみながら、姫によかれと願ったり、実父の内大臣の思惑など考えると、とても隠し覆せることではないと君は気づく。熟慮の末、尚侍ないしのからとして出仕させることを思い、大原野の行幸見物に姫を出す。気の進まぬまゝに出掛けたが、大勢の綺羅を競う供奉の方々を圧倒する帝の英姿には心を動かされる。それにしても何と源氏の大臣の御顔と似ていらっしやることか。心なし帝には威厳が備って御立派である。ご寵愛などと関係なく一般の女官職としてお仕えし甲斐いがあるように思えてくる。いち速く君は姫の心を見抜く。

出仕を前に姫の裳着の儀が行なわれ、内大臣が腰結役で晴れて父娘の対面があるが、実父は思う「美しい姫を君はほって置くまい。御夫人方

に遠慮して、実父の存在を表明し、恋人としながら宮仕えさせる気だな」

「藤袴」目許がにこやか過ぎると評された玉鬘姫であるが、姫は情に溺れない。源氏君の情にも流されず、帝への自分の気持も検討する。中宮と女御がそれぞれ君と内大臣に繋わりの在ることを思うと誰の後押しで宮中生活ができるのかと問題になるし、世間からも軽く見られて事あらばもの笑いの種にしようと呪っている人々も多いようだから、不愉快なことが起るに違いない。出仕せず六条院に居れば君の心を今迄のように押止めることは難しい。内大臣も君に遠慮されて実父としてはつきりと娘扱いしてくれそうもない。色めいた見苦しい有様で人から後指さされるのは煩しい、どなたかと結婚してから尚侍の宮仕えをすべきであろう。気持は気持として姫は立場から自分の在り方を決めてゆく。無理をせずできるだけ自分も相手も不愉快な思いに陥らぬよう気をつけて。このような分別心を作業者紫式部は女性のすべてに育てて欲しいと願ったのに違いない。兎角、女性は情にもろく、又視野が狭くなる傾向がある故に。一方、君は尚侍出仕を配慮して事済みたりと安堵したのに、息子の夕霧からその邪まな本心を見透かされ指摘されて、実際その通りなら姫が気の毒だし自分としても面白くない、人皆にそう思われているなら、ここは何としても潔白に押し通そうと奮起することになったのである。

社会に出て、女性が男性に混って生きる時、このような性的嫌がらせセクシュアル・ハラスメントが起りがちであるが、玉鬘姫が潔癖に身を守り、分別によって自分の人生を自主的に生きた姿は、今日なお、女性のお手本と言えると思う。

おわりに

以上、三つの視点から「玉鬘十帖」の内包している物語内容を考察したが、これによって『源氏物語』は女性教育の指南書であるとする筆者の考えを理解して戴けたら嬉しく思う。原文は趣き深い名文で語られているのに、わかり易いようにと試みた私訳が味もそっけも無く恥かしい次第である。原文をゆっくり味わいながら読む事で、私達の心は清められ揺さぶられ、泣き笑いみして、豊かに深く育てられてゆくものであらう。

注(1)「藤袴」岩波文庫『源氏物語』三 頁一六二 以下原文引用はすべて岩波文庫本による。

- (2)「並びの巻」講談社学術文庫『源氏物語湖月抄』上 頁四六。有精堂『源氏物語講座』第二巻 頁一六二 内容が本筋から側道にそれた巻々。
- (3)有斐閣『源氏物語の世界』第五集 頁一〇三五
- (4)原文『源氏物語』二 頁二八二
- (5)『枕草子』二〇段
- (6)玉上琢彌『源氏物語評釈』第五巻 頁五七『白氏文集』の縹戎人の詩が背景にあるとする。
- (7)岩波文庫『紫式部集』頁一三・八一
- (8)岩波文庫『紫式部日記』頁三〇 水鳥の水に浮いたような不安な生活、御輿の駕輿丁の若しみと同じ。
- (9)新潮日本古典集成『源氏物語』四 頁一二の註。
- (10)徳川美術館蔵
- (11)西村亨『王朝びとの四季』頁七二〜七七『源氏物語湖月抄』中 頁三七三
- (12)右同

- (13)原文『源氏物語』三 頁一四
- (14)徳川美術館蔵
- (15)『源氏物語評釈』第五巻 頁二一九〜二二四
- (16)『源氏物語湖月抄』中 頁三八七
- (17)原文『源氏物語』三 頁一七
- (18)『伊勢物語』三十九段
- (19)『大和物語』四十段
- (20)口語訳「鳴く声も聞こえない蛍の思ひでも人が消すことはできないでしょう私の思ひは消せません」
- (21)口語訳「声は立てないでわが身を焦がすばかりの蛍の方が口に出して言うより思ひが深いでしょう」
- (22)『源氏物語評釈』第五巻 頁三二五
- (23)『源氏物語の世界』第五集 頁二三五〜二五〇
- (24)『枕草子』二七一段
- (25)Ott Friedrich Bollnow: Mensch und Raum.
- (26)原文『源氏物語』三 頁七一